

〈今ここ〉における〈私〉と〈これ〉との出会いとしての現実性

伊佐敷隆弘（日本大学）

この提題の主張は、「①現実性は、〈今ここ〉における〈私〉と〈これ〉との出会いにおいて常に経験されている。」「②言語は〈今ここ〉を越えるから、現実性は語りえない。とりわけ、一般性を渴望する哲学者は現実性を見失う。」「③類比や比喻によって現実性を暗示することは可能である。」の3点である。物個体の数的同一性は「変化」概念や「行為」概念の前提だが、個体化の仕方は人間依存的かつ偶然的である。他方、個体化以前の世界（「何抜きのある」、Jamesの「パーセプト」）が「何」（概念）を充足するという関係は人間非依存的かつ唯一回のものである。「何」すなわち一般性を渴望する者は「何抜きのある」に不条理や吐き気を感じるが、そうでない者は、「何と出会っているか」によらず、「出会っているということ」自体を肯定しうる。ここで肯定的に経験されているのが現実性であり、詩人たちの言う「人のいない光景の美しさ」である。